

「土地」との出会い：〈場所〉の存在論的解釈

阪本，英二
九州大学大学院人間環境学府

<https://doi.org/10.15017/3578>

出版情報：九州大学心理学研究. 5, pp.133-143, 2004-03-31. 九州大学大学院人間環境学研究院
バージョン：
権利関係：

「土地」との出会い

—〈場所〉の存在論的解釈—¹⁾

阪本 英二 九州大学大学院人間環境学府

The Encounter with "Earth" —Ontological-interpretation of "Place"—

Eiji Sakamoto (*Graduate school of human-environment studies, Kyushu university*)

This paper is about "Place". While normal researches consider 'places' as phenomenal facts and try to understand them by gathering data about things or events, it is tried in this paper to understand "Place" itself ontologically, based on the assumption that Dasein should be understood originally. With the help of Heidegger's way of thinking, phenomenologically and existentially I (the author, as Dasein) analyze experiences, in which I 'am' in "Kinshai-dori" - a shopping mall - and understand it as "my place". Then it is disclosed that I dwell in and melt into the world of the place while coping with various things and events and being-with people. And it is revealed that the phenomenal 'place' is the world, which unfolds with the existential-history that belongs to the transcendental "Earth", and that the sense of "Place" itself is the encounter with "Earth".

Keywords: place, earth, dwelling-in, ontology, Heidegger, M.

心理学は「人間」だけに関心の向けられる学問として限定されるのであろうか。個別的な人間を扱ってきた伝統的な心理学はさることながら、間主観性や間身体性を重視する関係論的な立場 (e.g., 鯨岡, 1998, 1999) においても、個別的な人間の存在を基本的な前提としながらその人間関係の現象を扱うものである。このように心理学は一般に人間の現象を「図」として注目する学問である。しかしその図を規定するはずの「地」の議論は果たして必要ないのだろうか。「いやいや、文脈といったものが重要なことくらい当然配慮している」と反論があるかもしれない。しかし、この「文脈」とはこの場合一体何を意味しているのか。この言葉を述べることで全てが免罪符のように片づけられてはいないか。また概してそれは心理的あるいは社会的な文脈を指しているのであって、もっと具体的な「場所」が議論されてきたとは到底思われぬ。仮に心理学が「人間」に関心の向けられた学だとしても、そこでは逆説的に「場所」を議論する必要もあるのである。しかも、図と地を相互に浸透

したものと捉えそれをひとつの単純な「絵」のように思索する「原初的な人間環境-学」が必要なのである。

1. 問 い

問い

「〈場所〉²⁾とは、それそのものとしては、果たして一体何を意味するのか」、これが本論の問いである。

問われているものの次元

研究論文では一般に冒頭でその問題背景が述べられるものだが、本論が従来の「場所」にまつわる研究を問題領域として論じられることについては注意が必要である。

「場所」に関する研究は数多い。心理学や教育学を中心に近年盛んに議論されている「居場所」の問題はその代表的な研究領域である (e.g., 住田・南 (編), 2003)。それ以外にも、地理学、都市学、人類学、社会学などで行われるいわゆる「事例研究」も、ある特定の地域 (場所) が研究の対象とされる意味では、何らかのかたちで「場所」が問題とされていると言える。しかし、以上のような研究は概して現象された具体的な「場所」の諸相を扱っているにすぎず、〈場所〉そのものについては研究者によってすでに直観的に捉えられ問われることはない。

例えば、「福岡天神というまちはどのような場所か」という都市学の研究は、問いの設定段階からすでに〈場所〉の一定の了解に基づき「福岡天神には何があるか、

¹⁾ 本論は九州大学大学院人間環境学府に提出された修士論文 (2002) の一部について加筆・再編したものである。なおこの一部は第14回日本発達心理学会のラウンドテーブルにおいて話題提供として発表された。また本論の執筆にあたり、九州大学大学院人間環境学研究院の南博文教授、菊地成朋教授、橋瀬和秀助教授から多大なご指導を賜りました。こころから御礼申し上げます。

²⁾ 本論では、「現象している具体的な場所」と「場所そのもの」を区別して議論する必要がある。そこで前者を「場所」、後者を〈場所〉と区別して表記することにする。

何が起きているか」と問う。つまり現象している「場所」に関する事柄を問題にしているのである。それに対して本論は、このような研究においてもア・プリオリに了解されている〈場所〉そのものを根底から問う。すなわち〈場所〉を存在論的な次元において問うのである。この意味で、本論においては問われているものの次元が従来の「場所」研究とは異なっている。そして〈場所〉そのものを直接目がけようとする以上、様々な〈場所〉の解釈が盛り込まれた「学問体系」とは一旦訣別し、原初的な思索を開始しなければならないのである。

問いの意義

それではこの〈場所〉そのものへの問いは、果たして論じるに値するだろうか。ともすると「机上の空論だ」と見なされてしまうかもしれない。しかし、さしあたってはその批判を真っ向から受けとめ、本論はそれを乗り越えるべく挑戦したい。なぜなら少なくともこの〈場所〉への問いは、諸学が開始される以前の原初的な実践的日常世界（生きられる世界）を、それに即しながら、まずは丹念に思索していこうとする、言わば「原初的な人間環境-学」の挑戦と考えられるからである。

例を出せば、「自らの居場所を模索する現代人」が問題とされることにおいて、「私の居場所はどこにあるか、どのようなものであるか」と問うことは問題の本質ではない。彼は単にどこかに自らの「位置」を定めることを問題にしているわけでも、その特性を知ることでもない。この場合、問題の本質として根源的に問われる必要があるのは「居場所とはそもそも何か」であり、ひいてはそれは原初的な〈場所〉の解明を目指すことなのである。

近年「居場所」が議論されているという事実においても〈場所〉を改めて問うことが要請されているわけだが、このような「場所」にまつわる問題も「原初的な人間環境-学」を経由することでこそ、対処療法的ではないより問題の本質に根ざしたこたえを生み出していく可能性がもたらされるであろう。

問いの分析

それでは〈場所〉はどのように問えばよいだろうか。それを導くためには、まずこの問いを改めて解きほぐす必要がある。

「場所」という言葉は一見改めて問う必要がないように見える。例えば、「待ち合わせはいつもの場所で」とか「ここは私の場所だからね」と口にし、それで十分に言わんとするところが言えていると思っているし、それを聞いた人も十分理解できる。また自身が何らかの場所に存在していることも自明に思われる。しかし「場所」という言葉でわれわれは一体何を考えているのかと問われて、十分なこたえを用意できるだろうか。決してそんなことはない。われわれは確かにすでに〈場所〉というものを日常的に了解して生活している一方で、その「意

味」については依然漠然としており不明なままである。

このように〈場所〉への問いは、「日常的に了解されつつ意味において不明なもの」を問うという性格をもっている。

2. 思索の方法

『存在と時間』に即して

このような問いの性格は、『存在と時間』におけるハイデッガー（1927/1994）の「存在」の意味に対する問いに共通しており、このハイデッガーの思索の方法に倣うことが、〈場所〉への問いに有効であると思われる。『存在と時間』を紐解いてみよう。

ハイデッガーは、「ある（存在）」についてプラトン以来の形而上学は暗黙のうちに存在を「あるもの（存在者）」に即して考え、存在そのものを問うことを忘却し続けていると考えた。この存在そのものは、考えてみれば最も自明な事柄であり日常的に了解されているが、だからこそ逆説的にその意味については最も不明なものである。このような存在への問いに対してハイデッガーは次のように議論の糸口を見つける。

この存在者（現存在）には、おのれの存在とともに、かつこの存在を通して、この存在が自己自身に開示されている、ということがそなわっているのである。（『存在と時間』上 P47-48）

現存在は自己自身をいつも自己の実存から了解している。（同 p48）

以上の2つの引用は次のことを意味している。つまり、現存在である人間は「おのれが存在している」という事実において、またその事実を通して、存在をすでに日常的に了解しそれに対処しており、逆に言えばそのような現存在の存在に存在一般の意味を開示する手がかりがあるとと言えるのである。さらに、現存在は「おのれが生きている」ということにかかわりながら生きている、すなわち実存しているものであり、よって存在一般の意味はこの現存在の実存性の分析を通して行われようと目論見たのである。

この議論は、同じ性格をもった〈場所〉への問いにどのように対応するだろうか。存在と〈場所〉の関係については改めて十分な議論が必要であるが、さしあたり問いの構造に注目すれば、ハイデッガーの議論における「存在」という言葉を「場所」という言葉に置き換えても命題が成立することがわかる。すなわち次のような命題が導かれる。

現存在には、おのれの（存在する）場所とともに、かつその場所を通して、この場所が自己自身に開示されて

いる、ということがそなわっているのである。また、このような現存在は自己自身をいつも自己の実存から了解している。

これは、現存在自身が或る場所において事実的に存在することにおいて、現存在は〈場所〉と実存的にかかわっているということを意味する。よって、存在と同様〈場所〉の意味は現存在の実存性の分析を通して行われるのが妥当である。より簡単な表現で換言すれば、「ここは私（おのれ）の場所である」という現存在の了解について、現存在が「ここ」で生きているということに即して、「ここ」がその現存在にどのような実存的意味をもって生きられているかを開示する、さらにその生きられ方の分析を通して〈場所〉一般の意味は開示されうる、ということである。

さらにハイデッガーは次のように述べる。

哲学的に探求する問いそのものが、各自実存する現存在の存在可能性としてみずから実存的にえらびとられたときにのみ、実存の実存性を開示する可能性が成立するのであり、そしてひいては、ゆきとどいてもとづけられた存在論的問題設定一般の着手の可能性もそこに存するのである。(同 P51)

このように、存在や〈場所〉への問いはその構造上、第三者的で利害関心のない見地に立つ科学的研究とは全く異なり、或る現存在が自らの生において思索されるときにのみ、すなわち自らが問いを「わがもの」にしつつ自らを問うことによるのみ、その道が開かれるのである。

ところが『存在と時間』においてハイデッガーが選択した現存在は、個別的なハイデッガー自身ではなく、「平均的日常性」にある現存在、すなわち「さしあたりたいてい」の在り方をしている一般的な現存在であった。それは最もありふれた存在様態に定位して議論することを優先した結果であった。

分析の出発点においては、現存在を特定の実存の差別相において解釈するのではなく、それがさしあたりたいてい身をおいている無差別の相で露呈することに努めようと思う。(同 p112)

しかし、このような一般的な現存在が選択される時、そこでは実存の実存性すなわち生き生きと在る具体的な

在りようまでが平板化し、思索が概念的に行われてしまうおそれがある。そこで本論はハイデッガーと異なる道を辿り、生き生きと在る具体的な「現存在」と「場所」を手がかりに議論することを優先する。むしろそれこそが「原初的な人間環境 - 学」の挑戦として適切であろう。思索者自身を自ら開示することについて

それでは、どの「現存在」と「場所」が選択されるのがとりわけ適当であろうか。本論では、それぞれ「思索者自身（筆者）」と「思索者（筆者）自身の日常的かつ実存的な場所」を選択する。(以降、煩雑さを避けるために筆者を「私」と表記する。しかしこれは「コグト（思惟する自我）」や心理学的な「自己」を意味しない。あくまでも「筆者という現存在」を意味する³⁾。)

「私」が選択されることについて、それは私に何らかの特権的な知識や能力が備わっていて他の者にはそれがないから、ということではない。「思索する者」はこの際誰でもよい。ただし不可欠な条件が2つある。1つ目は彼が「思索する者」すなわち「現象学をする者」であるか、2つ目は彼が〈場所〉への問いを「わがもの」にしているか、ということである。

現象学については、ハイデッガーが次のように簡潔に表現している。

現象学とはすなわち、おのれを示すものを、それがそれ自身の方から現われてくるおりに、それ自身の方から見えるようにすること、という意味である。(同 P92)

現象学は主観的なものを扱う研究方法ではない。この誤解は「現われる」あるいは「見える」ことをすぐに心理的現象としてみなすことに起因する。しかし現われてくるものはむしろ、主観がわざわざそのように見ようと意図しないにもかかわらず、あるいは異なった見方をしようと試みるにもかかわらず、「そう見えてしまう」というように知覚される。現象学はこの「そう見えてしまう」事実にありのまま忠実に従うのである。そこではあらゆる学的判断が退けられ、ただ「それ自身のほうから見えるようにする」ことに重きが置かれる。また現象学は、「現われてくるもの」を無分別にそのまま記述すればよいのではない。現象学が目指すところは、現われてくるものの「現われ」の記述である。すなわち、そのように現われてくる「意味」を読み解くということが目指されるのである。

しかし逆説的にも、以上のような現象学の知識を心得ていることと「現象学をする者」であることとは直接関係がない。むしろ、現象学が本来の意味で成し遂げられる時は、このような学的関心を一切忘れ、それを忘れたことすら忘れ、ただ単純に自らが世界の真つ只中に浸り込みながら生きている時、すなわち「ただ生きている」

³⁾ よって、以降で述べられる「私」という語が主語となる様々な記述は一見エッセイのような無反省な記述に受け取られるかもしれないが、「私」という語は現に「場所」が開示される一箇の実存を示すものであり、何ら主観的な表現などではないのである。

時である。つまり現象学は、問う者の生そのものにおいて問いが「わがもの」にされているときに達成されるのである。これは現象学の難しさであり、また同時に単純さでもある。

先に〈場所〉への問いはその学問体系とは訣別すると述べたが、問いを実存的に問う必要性に即せば、それは論述上の欠陥ではなく、むしろ当然かつ適切な思索の条件として考えられるのである。

思索者自身の日常的かつ実存的な場所

後で詳細を述べるが、私にとって〈場所〉への問いはわがものにされている実存的な問いである。とすれば、当然その問いと分けがたく結びついている実存的意味を帯びた具体的な場所があるはずである。実際それは「箱崎商店街きんしゃい通り⁴⁾」(以後「きんしゃい通り」)である。「きんしゃい通りは私の場所である」、私はさしあたりこう言い切ることができる。またきんしゃい通りは私に問いを贈ってきた場所でもあり、問いがわがものにされるという点においても思索する手がかりはこの場所において他にはない。

現象学的記述

思索が具体的に表現されたものは、現象学的記述として呈示される。記述は「エピソード的記述」と「脱自的思索」の2種類がある。

「エピソード的記述」とは、あるまとまりのある経験が現象学的にすなわち自ずと開示されるように記述されたものであり、逆にこの記述によって経験は開示される。私自身が「私の場所」と了解しているあるいは了解され

ていった力動性は、そのままこの記述にもたらされるはずである。そこにこそ〈場所〉そのものを問う手がかりが見出せるはずである。

エピソード的記述から展開するのが「脱自的思索」である。これは、エピソード的記述で開示される経験において「場所」がいかにかに生きられているかを実存論的に問い、それが言葉へともたらされたものである。脱自的という点では、従来の場所論やその概念に手がかりが求められたり、エピソードを言語的あるいはカテゴリー的に分析したりするような科学的方法がとられることは一切ない。

3. 私に問いが贈られていることへの気づき

〈場所〉への問いがいかにかにして私にわがものにされたのか、述べておく。

〈エピソード的記述〉移転についての尤もな説明⁵⁾

「さかもと君…、わかってね」

韓国料理屋【S】がきんしゃい通りを出て行くことになった。

「まさか…」、信じられなかった。打ちのめされたような気分であった。【S】の主人Hさんはすまなさそうに事情を説明し始めた。

— 今までやってきた家庭料理に加えて、焼肉も食べられる店にしたい。それがずっと夢だった。この店では狭い大きな通りに面していないので、多くのお客に来てもらうことができない。この近く(きんしゃい通りから500メートルほど離れた大通り沿い、同じ地域である)のマンションの1階にちょうどいい大きさの場所を見つけた。そこに移ろうと思う。そこなら今まで来てくれたお客もきっとまた来てくれると思う。今までやってきた店は、知り合いに譲ってシャッターが閉まらないようにしたいと思っている。—

彼女の説明のひとつひとつが尤もなものであった。これほどまでに綿密になされた説明とその論理に対して、「でも、でも…」という曖昧な言葉以外に返す言葉がなかった。「それはだめだ、なんとかして引き止めなければ…。絶対にこの場所でなければ…」という一方的で感情的な言葉しか浮かんでこなかった。

〈脱自的思索〉

確かに【S】の判断も頷けた。移転先の方が立地的に有利だと見るのが合理的であるし一般的である。反論のしようがなかった。しかし私は彼女の説明を聞いて、単に諦めたわけでも感情的に悲しんだわけでもなく、私はその場で懸命に考えようとした。そして、【S】の身になって考えても、このような合理的な論理の陰でこぼれ落ちてしまうものが確実にあると思われた。「絶対にこの場所でなければ…」という焦燥感を私にもたらしてくるも

⁴⁾ きんしゃい通りは福岡市東区箱崎1丁目にある、全長約180mの一般公道であるが、日中は自動車の進入が禁止され商店街となっている。主に生鮮食品を売る商店が建ち並んでいる。
⁵⁾ 読者にはエピソードの細かい経緯など、理解の及ばない点もあるかもしれないが、それはこの出来事の本質には差し支えないと思われるので、脚注でそれまでの【S】とのかかわりを紹介しておくことにする。

【S】は当時きんしゃい通り内にあった小さな韓国料理屋である。主人Hさんは韓国出身で30代後半の恰幅のいい女性であり、【S】を1人で経営していた。最初に彼女に出会ったのは、「ちりのみ」(以後述べられる)を始めて少し経った頃であり、その当時この店は大改装して数年続けてきた韓国惣菜屋から食堂になった。昼間は歩行者天国となり通りに品物がワッと溢れ出すきんしゃい通りも、夜になると何事もなかったようにひっそりとして普通の道路に変わるが、そんな中【S】が食堂を始めたことで、夜のきんしゃい通りに顔ができたことが、私はずれしかった。静かで何もなくて誰もいないきんしゃい通りに、看板も兼ねた赤提灯が【S】の店先にぽつんと静かに灯る。私はこの時、【S】を応援したいという気持ちを強く抱いていた。

【S】が食堂を始めたことによる1つの大きなメリットは生ビールが飲めることであった。特に「ちりのみ」の際はうれしかった。【S】は【CUBE】の斜め向かいにある。ガラス戸をガラガラと開けて顔を出すと、その時間「おねえさん」は仕込みをしていることが多かった。「さかもとくん、ビール飲むと？」と言いながら、冷蔵庫に入ったジョッキを取り出しサーバーからなみなみと生ビールを注ぎ入れてくれた。

この時、紛れもなく【S】も「私の場所」であった。

のが、その「こぼれ落ちてしまうもの」であろう。しかしもどかしいことに、彼女を説得できるような十分に意味ある言葉は見つからずじまいであった。ただ、きんしゃい通りという「場所」こそが重要で、この「場所」は交換可能なものではないということだけが、直観的ながらも確かなこととして思われてきたのだった。

いま脱自的に振り返ると、その言葉を探ることこそがまさに〈場所〉の意味を問うていたということではないかと思われる。つまり、「場所」という言葉が意味するもの、なぜ「場所」が重要なものとして直観されてくるのかについて、私はこの時生きるうちで問うていたということである。

これが、〈場所〉への問いが実存的に私に贈られていたことへの気づきである。【S】の移転という出来事は決して思索が開始される契機ではない。むしろその出来

⁶⁾ 本章は補足的な内容であるので、〈エピソード的記述〉や〈脱自的思索〉という区分なく記述される。

⁷⁾ このプロジェクトについては、メンバーの1人である藤山(2001)の修士論文を参照されたい。このチームのアイデンティティは何度も変化してきた。これから述べられるように、もはや私は「商店街活性化」という肩書きと自己同一化していない。またこのチーム名は、通称をCUBEといい、これより後では通称を用いることにする。きんしゃい通り内の「立ち寄り処」= [CUBE]と混同しないよう注意されたい。

⁸⁾ 補足しておく。当時私はきんしゃい通りを訪れる度に、「商店街のために何かをしてあげている」という高飛車な雰囲気が自分のすることなすことに否応なく付きまってしまうようであった。「活性化」の言葉を背負いあかかも商店街に貢献しているかのごとく自分が仕立てられてしまうことは、私にとって脅威なことであった。「商店街が活性化しようがしまいが自分の生活や人生には特に関係ない」ところのどこかではそう思っているはずなのに、そんな自分が活性化のために何かをするというのも、変な感じがしてならなかった。しかしそれ以上に嫌だったことは、このような屈折した感情のために、身動きがとれなくなってしまうことだった。活性化を掲げ、かじり付くだけかじっておいて、今さらあっさり身を引いてしまうことも、人としてあまりにも無責任であるように思われた。そのような葛藤のなか、私は、何か積極的に「活動」を繰り広げることも、自分の都合に合わせて適当にかかわっていればよいという態度も、どちらも何か違うと直観した。当時はこの「活性化」の纏を脱ぎ捨てることに躍起になっていたが、次第にその囚われは「気にもされないこと」として解消されていった。

⁹⁾ この通称は、七輪で「ちりちり」焼きながらビールを「のみのみ」するというに由来する。私の呼びかけで研究室の仲間が数人参加するのが一般的なスタイルである。まちの人々が直接参加することはあまりないが、しばしばわれわれに声をかけてくれたり差し入れてくれたりする。

¹⁰⁾ 私はなぜか何の迷いもなく七輪を思いついた。私に色濃く現われてきた七輪とはどこかで見た路地の風景だった。なぜか、このどこかの風景ときんしゃい通りがすうっと重なり、まるでひとつの絵になるかのようであった。

¹¹⁾ 「ちりのみ」を始めた当初、商店街のど真ん中で火を熾し煙を立てながら肉を焼いている私が、さすがに人々には異様に映ったようだった。しかし、七輪を懐かしむ人々や「いいにおい」に食欲をそそられた人々が、好意的に私に話しかけてきた。また「ちりのみ」はたいい金曜日の夕方行われるため、「ちりのみ」の準備をしていると「ああ、今日は金曜日やったね」と声をかけられることがしばしばあった。

事に際して問いを自覚し、改めて問い始めたというべきである。そしてもしこの思索が達成されたならば、私は何か意味ある言葉を彼女に投げかけることができるかもしれないのである。

4. 前史⁶⁾

このようにして問われることになったきんしゃい通りであるが、ここが「私の場所」として解釈されるためには、私がかんしゃい通りと出会い、そこが「私の場所」になっていった経緯を踏まえる必要がある。

最初の出会い

ちょうど京都で卒業論文を書き終え気持ちが九州に向き始めた頃、「箱崎」というまちの名前に出会った。九州大学の新しい指導教官から1通のEメールが届き、その研究室で「箱崎商店街の中に『立ち寄り処(後の[CUBE])』を作っている」ことを知った。私はこの「立ち寄り処」にいつべんに興味を持ち、引越しを終えた3月、きんしゃい通りと「立ち寄り処」に足を踏み入れることになった。

活性化プロジェクトの違和感と「ちりのみ」

当時、わが研究室のメンバー(チーム通称:CUBE)による「箱崎商店街活性化プロジェクト」が進行中であった⁷⁾。この一環としてCUBEは地元の小学校と「商店街PR大作戦」というプロジェクトに取り組み、私もそれに参加した。このプロジェクトが多くの人々の目に大成功と映った一方で、私自身にはしっくりとしない違和感が残った。

その違和感は、このプロジェクトが商店街に何も貢献していないというものであった。それどころか、活性化は自分の生活や人生に特に関係ないと思っていることを否定できなかった。私は、積極的に「活動」を繰り広げることに適当にかかわることに納得できず、挙句次のように開き直った。「商店街で店を営んでいる人は、まずはそこで商売をやりたいからやっているはずだ。活性化のために店を出しているのではない。それが自然なことだ。私にもそんな在り方ができるはずだ。何も考えずにやりたいと思うのに任せてそれをやろう。」⁸⁾

私はこのようにしてきんしゃい通りという「場所」に引き込まれ、巻き込まれていった。そして以来私は、きんしゃい通りの[CUBE]において通称「ちりのみ」⁹⁾という飲み会を始めた。これはきんしゃい通り内の商店から肉、魚介類、野菜などを調達し、七輪¹⁰⁾に熾した炭火の上で焼き、それを肴にビールなどを飲むというものである。「ちりのみ」は、約3年間不規則ながらも現在も継続中である¹¹⁾。

5. 「私の場所」の諸相とその現象的解釈

3年ほどの間に幾度となく「ちりのみ」が行われ、きんしゃい通りのどこに何があり、そこにいる人が誰であり、そこに流れる時間や空気一、私はそこで出会う様々な存在者について当たり前のように語ることができ、何の戸惑いもなくきんしゃい通りの世界に対処するに至った。同様に、私も「ちりのみ」も様々な人や動物に知られ対処されている。もはやきんしゃい通りの一部であるとさえ思われるほどである。そんな「ちりのみ」を通して私が出会っているものは多い。

そこで本章ではこの「ちりのみ」を取り上げ、それをエピソード的記述として実況中継的に順に記述している¹²⁾、この「場所」が現象的次元において意味しているものを開示する。これは次章で〈場所〉そのものの意味を思索する手がかりとなる¹³⁾。

5.1. 住まうというあり方

まずは、私がきんしゃい通りを訪れる際に、どのようにこの場所が了解されその世界に対処されているかを開示してみたい。

〈エピソード的記述〉「今日もいつもどおり」

金曜日の夕方である。

夕方のきんしゃい通りは少しだけ慌しい。通りを歩く人の足取りもどことなく早く、八百屋の店先で品物に身を乗り出す人の眼差しも鋭い。主人も次から次へときばきとお客をさばいては、「ありがとうございま〜す」、その度に発せられる抑揚のある声が明るく全体を覆っている。

私は[CUBE]の前に自転車を止め、そこにあるテーブルの上にかばんを放り投げると、まずその[CUBE]を背にして通りを向いて立ち、右を向き、左を向き、あたりを一通り眺める。すると先ほどの慌しさは不思議と消えていて、そうやって眺めている間によく聞こえてきた有線放送の演歌とあいまって、全体がのんびりとする。おばあちゃんが買物カートを転がしながら道の真ん中をゆっくり歩いている。斜め向かいの八百屋では客（あるいは友達）が店先の椅子に腰掛け、店番をしているおばあちゃんと世間話に花を咲かせており、私と目が合ってお互いに笑ってゆっくりと頭を下げる。ちょっと先では、

¹²⁾ これは、ある特定の日に行われた「ちりのみ」の詳細な記録に基づいて記述されるものではなく、度重なる経験に基づく典型的な「ちりのみ」の記述であり、言わば現象学的に抽出された「ちりのみ」の記述である。

¹³⁾ 今や「ちりのみ」は思索の手がかりとされているが、上述したように「ちりのみ」は実践的日常世界における道楽的な「やりたいこと」として単純に始められており、それは〈場所〉が思索される現在においても基本的に変わらない。「ちりのみ」は〈場所〉への思索に常に先立つのであって、その逆ではない。つまり、「現象学をする」ための条件を満足するために意図的に学的関心から逃れようとしているのではない。

まだら模様のネコがのっそりと通りを横断している。

「今日も何も変わらずいつもどおり」、私はそれを確認すると早速4軒隣の肉屋に向かった。

〈脱自的思索〉

住まうというあり方

のんびりとした雰囲気、その心地よさ、「いつもどおり」という安心感。この時、かつてのように活性化云々が意識されることなく、ただこのきんしゃい通りにずっと融け込みありのままをそっくりそのまま受け容れてしまっている。人々や動物は、どこかそれなりに調和のとれたかたちで毎日を営んでいる。彼らも、現状を憂えたり運動を画策したりする以前に、私と同様に現状に対処してしまっているようである。そして私にとって、このように調和のとれたのんびりしたきんしゃい通りでこそ、何にもとらわれず生きる自由が与えられるように思えてならない。このような意味で、彼らも私もきんしゃい通りに住まっている。ここでの「住まう」とは、当然「住居を構えている」という意味ではなく、きんしゃい通りの世界に「私」が融け込み体験的に消え失せ、ただ「いつもどおりのきんしゃい通り」というひとつの単純な出来事だけが開かれているという在りようである。「いつもどおりの心地よさ」の本質はこの「住まっている」在りようそのものである。

住まわれていることのかたち

逆に、きんしゃい通りの現象に定位すれば、「住まわれていること」の具体的なかたちをその様相そのものに、すなわち「のんびりさ」にそのまま見て取ることができる。つまり、おばあちゃんが道の真ん中をゆっくり歩いたり、客が店先に腰掛けて世間話をしたり、ネコがのっそりと通りを横断したり、あるいは私がちりのみをやりにくることは、この「活性化」していないきんしゃい通りに「住まい」を得ており、またそのように「住まわれる」ことによって、このきんしゃい通りがのんびりと開かれている。

5.2. 「ちりのみ」の場所 [CUBE]

飲み会「ちりのみ」は[CUBE]で行われる。その準備作業のエピソード的記述を通して、きんしゃい通りの人々と私が共存在する在りようと様々な道具と作業手順が対処される様子を明るみにし、「ちりのみ」がいかにかひとつの纏まりをなす世界として展開されているかを開示したい。

〈エピソード的記述〉ちりのみの手引き

肉屋で豚バラの串を調達し再び[CUBE]に戻ってきた。[CUBE]の奥にはドアがあり、カギがかけられている。力をこめれば簡単に壊れそうな、木ねじで留められたカギである。そのドアの向こうはちょっとした物置になっている。私はそこから2つの段ボール箱を持ち上げる。1つは「卓上しちりん」と書かれた箱、もう1つは櫥の

炭が詰まった箱である。それらをそのまま路上まで持っていく、アスファルトの上に置くと、まず箱から七輪を取り出す。次に、[CUBE]の中にある事務机の、上から2番目の引き出しを開け、卓上コンロの入った箱を引っ張り出す。さらにその引き出しから、火バサミを2本、金毘羅さんの赤い渋ウチワ、味塩コショウを取り出し、それらをとりあえず白いテーブルの上に置いておく。[CUBE]には真ん中に大きな白いテーブルと、その横に並ぶように、くすんだ赤色の持ち運びのきく楕円テーブルが置かれてあるのだ。卓上コンロを箱から取り出しアスファルトの上に置くと、コンロに入ったままのガスボンベをレバーを下げてセットし、つまみをひねり点火する。たいてい2回目に点火する。コンロの真ん中にゴーツと青い炎が立つと、七輪の入っていた箱の底から丸い網を取り出しコンロの上に載せる。それと同時に炎は赤くなる。前回焼いた肉の脂が網に残っていて、それが燃えるのだ。これは我流の網消毒作業でもある。七輪の中にも前回の残り物、「消し炭」がある。消し炭とは前回水をかけて火を消したあとに残った炭のことで、よく乾いていれば次に使うときに火が付きやすいと、隣の文房具屋のおばさんが教えてくれた。その消し炭を火バサミで七輪の中から1つずつ取り出しては、網の上に並べていく。消し炭はしばらくすると「ぱちっ、……ぱちっ！」と激しい音を立てるのが特徴的だ。時には炭が砕け散るようにはぜるので、離れていないと危険なのだ。今度は箱の中から新しい炭を取り出し、それをまずアスファルトの上に置く。次にその炭のヒビに火バサミを突っ込み、火バサミの要の部分を手のひらでまっすぐ下に叩く。すると炭は簡単に2つに割れる。これを繰り返し炭が適当な大きさになれば、それをコンロ上の赤くなり始めた消し炭の上やその周りに積み上げていく。火が適当に点くのを待ちながら、楕円テーブルを軒下まで運び出し、その上にウチワと塩コショウを先ほどの白いテーブルから置き換えておく。

向かいのクリーニング屋では、この時間女将さんが座っていて、伝票整理をしている。

「Yさん、ちょっと火見とおいてもらっていいですかね？」

女将さんはうなずきながら「よかよ」。「すみません」と言うと同時に、私はきんしゃい通りの端（上手：カミテ）の角にあるコンビニに向かって歩き始める。

缶ビールが1本入った袋をぶら下げて、すばやく[CUBE]に戻ってくる。するとその間にコンロの上では炭が所々赤くなり始めている。ビールの入った袋をそのまま楕円テーブルの上に置くと、[CUBE]の中からプラスチック製の白いイスを路上に引っ張り出し、それに腰掛けると、ころがっている火バサミを拾い、コンロの上の炭を1つずつ七輪へと移し、空気の通りがよいように

組み上げていく。すべて移し終わるとつまみを回してコンロの火を止める。七輪の方とは言えば、空気口を最大に開け、ウチワをヨコ方向にバタバタさせてそこへと空気を煽ぎ込む（以前、ウチワをタテに動かしていると、斜め向かいの海産物屋のおばさんがつかつかと歩み寄ってきて、怒られた。「見とれん！タテに煽いだら火が消えてしまうやない。ヨコに煽がんと…」、おばさんはウチワを手に取りしゃがみ、実際にバタバタさせて見せた）。ウチワを煽ぐリズムに合わせて、ぼわっ、ぼわっという音をたて、炭は次第に赤い色を増し火は育っていく。組み上げた炭の真ん中で、ひそかなしかし確かな強さを持った炎が自らの力で生きていく流れに乗れば、もうそれ以上何もする必要はない。後は自分でしっかり燃えていく。コンロの上に載せていた丸い網を七輪の上に載せ換えると、コンロは箱にしまわれ、元通り2番目の引き出しに戻される。そのついでにドアの向こうの物置からホウキとちりとりを出してくる。そしてアスファルト上に散らばっている炭の破片を掃き取り、七輪の中に流し込む。ホウキとちりとりは最後の片づけのために、そのまま近くに立てかけておく。

路上の白いイスに腰掛け、楕円テーブルに置いておいた豚バラの串をバックから引っ張り出し、網の上に載せる。まだ温まりきっていない網は串をのせても音を立てない。ただ七輪の奥からいかにも高熱の透き通った炎がちかちかと静かな音を立てて、豚バラを炙っている。先ほど買ってきたビールを「ブシュッ」と開け、ぐびぐびと口に注ぎ入れる。「う〜っ…！」と顔がしかむと、とりあえず全て用意が整い、やれやれといった感じで気持ち落ち着く。暗さを増してきた辺りが余計にゆっくりしている。

「勉強せんで、こんなことばかりしてる。あんた、大丈夫とね？」向かいのクリーニング屋の大将が笑いながら店から出てくる。「どうでしょう…」とお茶を濁しておく、今度は乾物屋のおばさんが仕事帰りにいつも通りの声をかけていく、「今日は何のごちそうね？」。「おつかれさまでした」、私はただにいと笑ってあいさつする。「あなた、感心ねえ。よう働さんしゃる」、[CUBE]の斜め向かいで野菜を売っている「新宮のおばあちゃん」がほめてくれる。「いえいえそんなことないですよ」、手を横に振って応える。

〈脱自的思索〉

住まうことと共存すること

ここでいう共存とは、私自身がきんしゃい通りの人々の在りように見出だされ、また私の在りようになんが見出されるといった、相互浸透的におのれが規定されることを意味する。様々な人々と共存していることにおいても、私はきんしゃい通りに住まっている。例えば、後半に記述される様々な人々の在りようにそれは確認で

きる。クリーニング屋の大将は度重なる「ちりのみ」に対して、皮肉にも私の「学業」を心配するまでになってしまった。乾物屋のお婆さんの「今日は何のごちそうね?」という言葉は決まって私にかけてくれるものであり、実際のところ質問というよりあいさつのようなものであるが、彼女の「今日は」という言葉には、「ちりのみ」が何らかのかたちで彼女に了解され定着していることが感じ取れる。この言葉は単純に現在を指しているのではなく、「この前(のちりのみ)は」という歴史を背負った上での「今日は」という言葉なのである。「新宮のお婆ちゃん」の「よう働きんしゃる」という言葉にも、一連の準備をずっと見守ってくれていたことを窺わせる。そして私はそういった人々をありがたい気持ちをもって受けとめる。

共存在は人々との直接的な出会いに限らず、道具や作業の在りようにも及んでいる。前回水をかけて消した炭が「消し炭」として出られることは、それを教えてくれた「文房具屋のお婆さん」の存在を含み込まずには語りえず、同様にウチワを横に煽ぐことに意味が与えられるのも「海産物屋のお婆さん」の存在が煽ぐ行為にその都度含みこまれているからである。

私はきんしゃい通りに住居を構えているわけでも、毎日そこで生活を営むわけでもない。しかし、きんしゃい通りの人々と共にそこに存在している。私だけが孤立して理解不能なことをやっているという格好にはなっていない。彼らの日常生活と私の日常生活(限定的だが)が編みこまれ、「ちりのみ」というひとつの「金曜の夕方」の出来事がきんしゃい通りに展開する。換言すれば、私はきんしゃい通りの実践的日常世界の展開に無理なく適合し、それどころか共にその世界を展開させているとも言えるのである¹⁴⁾。

対処される道具と手順

私は特に意識することも迷うこともなく、様々な状況に道具と手順をもって対処してしまっている。記述された道具を列挙してみると、その多さに我ながら驚く(計17個挙げられている)。これらはいつの間にか揃ってしまい、購入の経緯を憶えていないものがほとんどである。また、どこにしまっておくかをわざわざ決めたわけではないのに、いつの間にかあるべきところにそれぞれが落ち着いてしまった。これらはすべて「ちりのみ」に必要

なものであり、無駄なものが何1つないばかりか、これらの道具が欠ければ「ちりのみ」が成立せず、すべて「ちりのみ」でもって見事に連関している。言わばこれらの道具連環のうちに「ちりのみ」は出来上がっているのだ。逆に言えば、それゆえにこれらは「ちりのみ道具」と呼ばれるのである。そしてこれらのものを私が利用する際に、また利用することにおいて、これらは私に「ちりのみ道具」として了解される。

また、当然ながら手順が狂うと火は熾こせない。いざ経験を記述するとそこには細かな作業が連なっているが、この手順も、いちいちその都度考えているわけでもわざわざ覚えたわけでもなく、いつの間にか身につけてしまったものである。この手順は「ちりのみ」に合目的であるが、それはア・プリオリな了解に基づくのであり、「ちりのみ」をする際に、「ちりのみ」をすることにおいて、その都度自ずと展開される手順である。必ずしも理性的な計画に基づくものではない。

「ちりのみの場所」の意味

本章によって「きんしゃい通り ([CUBE])」という「私の場所」の現象的な意味の一端が開示された。それは次のようにまとめることができる。

きんしゃい通りが「私の場所」として了解されているとき、私は住まっている。つまり、きんしゃい通りは「いつもどおり」というひとつの纏まった出来事として開かれ、また対処され、その在りようには私は融け込んでいる。また「ちりのみ」はきんしゃい通りの人々と私が共存在しながら行われており、その準備作業においては様々な道具や手順が「ちりのみ」で連関したものととしてその都度私に会われ対処されている。このようにして、きんしゃい通りには「ちりのみ」という世界が展開されている。

6. 〈場所〉の存在論的解釈¹⁵⁾

それではこのように「場所」が生きられていることにおいて〈場所〉そのものは一体何を意味しているのだろうか。本章では存在論的な次元に思索を進めたい。

実存的歴史と現在に開かれる世界

あらかじめ概念について断っておく。以降で、世界を可能にするものとしての「歴史」が議論されるが、この歴史とは「かつてしかじかのことがあった」と淡々と記録されるような史学的歴史ではない。それは知識として表象される性格をもつ歴史であり、現存在の実存には直接かかわりのない歴史である。むしろここでは、私という現存在の生に直接意味をもって被られている実存的な歴史が議論されなければならない。そこでこの歴史を特に「実存的歴史」と呼ぶことにしよう¹⁶⁾。

さて、前章で述べられたように「ちりのみ」が展開す

¹⁴⁾ この共存在という存在様態に即せば、記述されている経験を主観に還元してしまうことは明らかに誤解である。

¹⁵⁾ この部分は一般的な「論文」において「考察」に相当すると言えようが、その場合も、常に現象に即して現象それ自身がその意味を明らかにするように、また「私」という実存においてこそ解釈(思索)されなければならないのであり、現象を対象化した概念的な考察を行ってはならないのである。

¹⁶⁾ 歴史性については紙幅の都合により改めて十分に議論することにしたい。ただし阪本(印刷中)は別の論考において実存的歴史の歴史性を議論している。

るのは、私が [CUBE] に住まうからこそである。その背景には、それまでに何度も「ちりのみ」を行い、いつの間にかその道具が網の目のように連関してゆき、私自身や他の人々が「ちりのみ」にかかわりそれに対処するに至ったという歴史がある。それは私がこの「場所」を理解する歴史である。そして現在の私はこの実存的歴史を引き受けながら「ちりのみ」を行っているのであり、この実存的歴史こそが様々なものを「ちりのみ道具」として現成させ「ちりのみ」の展開を導いている。「ちりのみをしよう」という動機すら、[CUBE] におけるそれまでの実存的歴史が現在に選択されうる意味となって受け取られていることに基づいている。一方で「今日のちりのみ」は新たな実存的歴史として沈殿しつつある。「今日のちりのみ」を含み込んでこそ「次回のちりのみ」は展開するのであり、その「場所」に次第に住まえるようになるのもそれゆえである。

このように実存的歴史は、現在そこで生き生きと展開する世界を可能にするものであり、同時に、そこで展開する世界の在りようそのものに実存的歴史は結実し、かつ常に動的に将来に向けられている。このように展開する世界の在りようそのものがまさに現象的な「場所」である。換言すれば、「ちりのみの場所」という言葉を聞いてこの「場所」が理解されるとすれば、この「ちりのみ」という1語が分厚く語っているのはそこで展開される出来事の世界そのものであり、その理解には「ちりのみ」の実存的歴史が充実している。

実存的歴史は土地に沈殿している

ところで、例えば「場所の記憶」と言ったり、「地蔵や大木が私たちを見守ってきた」という信念があったりするように、かつてあったはずの「もの」が存在しなかったり変わり果ててしまったりしたとしても、その土地にただで実存的歴史が立ち現れてくることがある。この場合、実存的歴史は表象的であるが、それでもこの実存的歴史はその「土地」の上でこそ甦る。また、ある土地から切り離された「もの」が別の土地に置かれ異なる世界（「場所」）に属することになると、そのものにまつわ

るかつての実存的歴史はその「場所」には結実しない。いわゆる文脈が変わるという事態である。このように現存在がある土地に赴きその「場所」に自らが存在することにおいてはじめて実存的歴史は甦るのであり、それに伴ってその「場所」が開かれうるのはある唯一の「土地」の上に限られている。以上のような素朴な現象に即しても¹⁷⁾、この実存的歴史は必ずしも心理学的な記憶として常に持ち歩かれているわけではなく、むしろ「土地」という実体に蓄えられているかのごとく直観されていると考えた方が自然である。とすれば、実存的歴史は根源的には土地に属し、この実存的歴史によって現象的な「場所」は可能になるのであるから、「場所」はこの土地との根源的次元における出会いに基づいていることになる。
〈場所〉は土地との出会いである

〈場所〉とは土地との根源的な出会いを意味している。その出会いに基づいて現象的な「場所」は可能である。つまり、人は場所と言う度に、実は自らが土地の上に存在し住まっていることをその都度了解しているのである。

ここで述べられている土地とは、地図や地球儀のように認知的に表象されるものではなく、足元に具体的に体験されるものである¹⁸⁾。そしてそれはまずもって人間に住まわれる文字通りひとつの根源的地平でありながら、太古から人間を超越し世界とは無縁に広がっていると見なされているものである。現代において土地は表象されがちであるが、完全な対象として土地を把握することは根源的には不可能である。われわれは土地の上に投げ出され（与えられ）、高々それに対処しているに過ぎないと言ふべきであろう。〈場所〉とはこの把握不可能で世界と無縁な土地が世界内の現象として出会うことである。

図と地の両義性になぞらえて

本論の〈場所〉の解釈は、まず世界として「場所」を解釈し、その世界の唯一性が土地によって与えられることを開示したが、この解釈は一体何を明るみにしたのだろうか。ゲシュタルト心理学の「図と地の両義性」の解釈になぞらえることで、有効な示唆を得ることができるであろう。ここでは現象的「場所」の世界が「図」であり、土地が「地」に相当する。

図と地は両義的な関係にあるのだが、地は隠れることが本分であるため、図の在りようばかりが意味のあるものと見なされて目が奪われがちである。まるで図だけを独立に取り出すことができるかのごとくである。しかし地が異なれば同じ図であることは不可能である。例えば図と地のコントラストが変われば、図は暗くも明るくも、小さくも大きくも知覚が変化してしまう。地は隠れているがにしてその図をまさにその図として与えるものである。その図はその地と出会ってこそはじめてその図たりうるのである。

¹⁷⁾ この議論で挙げられている現象の本質は、現存在が「場所」において住まえていないあるいは住まえなくなるという欠如態において、実存的歴史そのものがそれとして露呈し、それに伴い「土地」の存在が明るみになることである。この欠如態にある「場所」の様態を十分に明るみにすることは「土地」と「実存的歴史」の関係を議論する上で重要であるが、ここでは紙幅の都合で十分に議論できない。ただし阪本（2002）の修士論文では議論されている。

¹⁸⁾ 「大地（Earth）」と換言してもよいが、この語はわれわれ日本人には馴染みが薄く、局在性が表現されにくいので、あえて「土地」と表現した。Earthとは言い、「地球」という科学用語と同義で解されてはならない。また表面的なニュアンスのある「地面（Ground）」や海との対比が拭い去れない「陸（Land）」という語とは区別されなければならない。

〈場所〉に議論を戻せば、その「場所」がその「場所」でありうるのは、その背景として土地という文字通りの「地」が敷かれているからこそである。そしてその土地との出会いによってその「場所」が与えられるのであり、〈場所〉そのものの意味はこの土地との出会いに他ならない。その土地においてでなければその「場所」は与えられない。しかし、図である現象的「場所」の世界に目が奪われ土地の存在は容易に隠され退けられるため、「場所」は交換可能なものとして見なされることが起こるのである。しかし甦る実存的歴史が必然的に異なるその「場所」は、表層的な見えがかり以上に、根源的次元においては全く異質である。それは人間の理性的な努力の及ばない事実であろう。

7. 結 語

【S】の移転について語れること

本論の〈場所〉の解釈は、思索の契機であった【S】の移転の問題に差し戻されそこに引きつけることができずこそ真に意味を持つはずであるから、結語に代えてこれに試みたい。しかし、いま私は【S】の店主Hさんに有意味な言葉を語ることができるのか、心もとないことには未だ変わりはない。

「お店が移転したらね、また1から全く新しいお店を始めることになるような気がする。【S】という名前や料理の味は同じかもしれないけど、そこは全く別のお店というほどに変わってしまうと思う。今まで来てくれた人も、来なくなるかもしれない。それは人間関係だけで片づけられる問題じゃないよ。ここで今までにあったことやずっとやってきたことは、新しい店で思い出すことはきっと難しい、ここでの思い出みたいなものは、ほんの少ししかそこには持っていけないと思うよ。それどころかどんどん忘れられていくような気がするんだ。僕だけじゃなく、今までこのお店に来てくれていた常連さんも、Hちゃんも同じだと思う。もちろんわからない、違うかもしれないけどね。

きんしゃい通りで焼肉屋をやったらいんじゃないかな。確かにちょっと狭いし、いろいろ事情もあるだろうけど、ここでやるんだったら、今まで来てくれた人はこれからもずっと来てくれると思うんだ。「ああ焼肉も食べられるようになったんだ」って。でも移転して焼肉屋を出したら、「こんなところにも新しい焼肉屋ができたんだ」ということになると思う。確かに移転先にもメリットはあると思う。でも失うものもある、それは思っている以上にずっと大きなものだと思う。それはその場所を大切にしてきた常連さんには、自分の人生の何年かを失ってしまうような大きくて重いものだと思うよ。それでも移転すると決断するのなら、僕はそれでいいと思う。」

対話へ

さしあたり〈場所〉への思索を達成した今となって、様々な場所の思索者(場所論)ともようやく「対話」が可能になるであろう。

さしあたり冒頭で取り上げた2つの「場所」研究について、批判を加えたい。まず、「場所」が問題にされる事例研究では客観的で表象的な場所が前提されているが、誰にも出会われていない場所は在りえないばかりか研究すら不可能である。それゆえ「場所」はまず現存在において生き生きと開かれている世界として捉える必要がある。しかし「居場所」の問題のように、「場所」が個人によって主観的に意味付けられた世界として捉えられるのも不適切であり不十分である。その世界は超越的な土地との出会いに基づいているのであり、閉鎖的で持ち運び可能な主観的世界として取り上げることはできないからである。

〈場所〉そのものへ関心が向けられた思索や研究は、本論に先行して他にもあり、それらについてはいずれとも実りある対話が可能であるように思われる。その代表的なものは、Heidegger (1954) による「四方域 (das Geviert)」としての〈場所〉の思索、ボルノー (1963/1988) による人間学的空間論、ベルク (2000/2002) による存在論的風土論、日本で花開いた現象学的建築論における「建築学的場所論」(増田 (1999a, 1999b), 前川 (1998)), あるいはレルフ (1976/1999), トゥアン (1977/1993), Seamon (1979) ら現象学的地理学による場所の経験に関する諸研究であろう。しかしこれらとの対話については以後の機会に譲ることにしたい。

文 献

- ベルク, A. 中山 元 (訳) 2002 風土学序説: 文化をふたたび自然に, 自然をふたたび文化に 筑摩書房
(Berque, A. 2000 *ÉCOUMÈNE: Introduction à l'étude des milieux humains*. Paris: Belin.)
- ボルノー, O.F. 大塚恵一・池川健司・中村浩平 (訳) 1988 人間と空間 せりか書房
(Bollnow, O.F. 1963 *Mensch und Raum*. Stuttgart: W. Kohlhammer.)
- Heidegger, M. 1954 *Bauen Wohnen Denken. Vorträge und Aufsätze*. Pfullingen: G. Neske.
- ハイデッガー, M. 細谷貞雄 (訳) 1994 存在と時間 (上・下) 筑摩書房 (ちくま学芸文庫)
(Heidegger, M. 1927 *Sein und Zeit*. Halle a.d.S.: Niemeyer)
- 藤山英昭 2001 まちづくりを継続させる仕組み — 「商店街活性化プロジェクト事例研究」— 九州大学大学院人間環境学府修士論文 (非公刊)

- 鯨岡 峻 1998 両義性の発達心理学—養育・保育・障害児教育と原初的コミュニケーション— ミネルヴァ書房
- 鯨岡 峻 1999 関係発達論の構築—間主観的アプローチによる— ミネルヴァ書房
- 前川道郎 1998 〈場所〉ということ 前川道郎（編）建築的場所論の研究 中央公論美術出版 Pp.3-31
- 増田友也 1999a 増田友也著作集4 風景論：存在論的建築論 ナカニシヤ出版
- 増田友也 1999b 増田友也著作集5 建築以前：建築について ナカニシヤ出版
- レルフ, E. 高野岳彦・阿部隆・石山美也子（訳）1999 場所の現象学：没場所性を越えて 筑摩書房（ちくま学芸文庫）
 (Relph, E. 1976 *Place and Placelessness*. London: Pion.)
- 阪本英二 2002 場所の存在論的解釈—「私の場所」としての箱崎商店街きんしゃい通りを手がかりに—九州大学大学院人間環境学府修士論文（非公刊）
- 阪本英二（印刷中）場所はいかに歴史的に生きられるか—「私の場所」を手がかりに— 人間・環境学会誌
- Seamon, D. 1979 *A Geography of Lifeworld*. New York: St.Martin's.
- 住田正樹・南 博文（編）2003 子どもたちの「居場所」と対人的世界の現在 九州大学出版会
- トゥアン, Y. 山本 浩（訳）1993 空間の経験—身体から都市へ— 筑摩書房（ちくま学芸文庫）
 (Tuan, Y. 1977 *Space and place: The Perspective of Experience*. Minneapolis: University of Minnesota Press.)